

ようこそ⑮ さあ、インドへ行こう

図書館長 古川 聡

「インド」というとカレー、もしくは世界遺産のタージ・マハルが思い出されるだろう。そのインドに今年二回も訪れた。最初は娘に誘われて行って行っただけだが、訪れてみるとなんと刺激的な国なのか。帰国してすぐに二回目を模索。そして今回もつと衝動的であったのが、ガンジス河に面したワラーナシー（バラナシ）の街であった。

夕方から川辺では僧侶による祈りの儀式が行われる。それを目指して通りを歩くが、牛は寝ころび、バイクは逆走り、物売りが執拗についてくるのでなかなか進まない。ようやくたどり着くとインド人と体が密着状態になり、腰が引ける。翌朝は沐浴場に行こうと思うが、ゴミと動物の糞、それに人の汗の匂いでむせ返る。その中を祈りを唱えながらインド人が列をなす。濁りきったガンジス河の水を頭からかけて祈る女性、せっけんで体を洗う男性、生後数か月のわが子の全身を川の中に沈めて安堵感に浸る母親。すべてが私にとつてはありえない状況であった。インド人のガイドは、ガンジス河の水は腐らないから皆持ち帰るのだと言う。真偽のほどはともかく、それを誰もが信じている。

一般的なインド人の日常生活をガイドに尋ねた。だが、「インドには六種類の人間がいる。大富豪から藁の家に住んでいる人までだ。誰が一般的なインド人なのか」と逆に聞かれた。答えに窮す。一般的とは何か、普通とはどのような人なのか。自分は普通の人なのか。当然と思うことが当然とは限らない。自分の常識は皆の常識ではない。

図書館の仕事も終わりに近づいてきた。時間に余裕もできらるだろう。その使い道はもちろんインドだ。クラクシヨン（クラクシヨ）を鳴らし続ける車と縦横無尽に走り回るオートリキシャの間で牛たちが悠々と闊歩するインドの街で、自分の行く末を考えてみるのもよいだろう。

図書館の う・こ・き

◆自由閲覧室でこんなことやってます！-秋のイベントのご紹介

芸術祭や演奏会など、何かとイベントが多い秋。図書館でも秋恒例のイベントがありますが、自由閲覧室で開催する2つの企画をご紹介します。

一つめは「朗読の楽しみ」。図書館委員会の先生方の発案でスタートし、今年で第5回を迎えます。なぜ音楽大学で「朗読なの？」と思われる方がいるかもしれませんが、「朗読」として人が発する言葉を耳で受け取り、心で感じることもとても素晴らしいことです。今年は、朗読家の先生をお招きしています（11/13開催予定）。ぜひ耳で言葉を堪能してください。

もう一つが「図書館公開講座」。本学の先生に自由なテーマでお話を頂き、併せて関連する図書館資料をご紹介します企画です。今年は江澤聖子先生を迎えて、「手稿」をテーマにお話していただきます（12/18開催予定）。「手稿」（英語：manuscript）とは、手書きの原稿、写本といった意味。図書館では、「手稿譜」、つまり手書きの楽譜もたくさん所蔵しています。「手稿譜」は、作曲家自身が書いたもの、他の人が手書きで写したものなど、いろいろなものがありますが、どれも書き手の個性がいっぱいです。OPACでの楽譜検索の際、「件名」に「manuscripts」と入れてみてください。たくさん「手稿譜」が見つかりますよ。

なお、ここでご紹介した2つのイベントの詳細は、巻末の「イベント情報」、あるいは図書館HPをご覧ください！